



TITLE:

資料18 原猿類の外腹斜筋と筋内神経分布の形態(V 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

児玉, 公道; 小泉, 政啓; 川井, 克司

CITATION:

児玉, 公道 ...[et al]. 資料18 原猿類の外腹斜筋と筋内神経分布の形態(V 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1998, 28: 121-121

ISSUE DATE:

1998-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165066>

RIGHT:

資料18

原猿類の外腹斜筋と筋内神経分布の形態

児玉公道・小泉政啓・川井克司(熊本大・医)

1) ショウガラゴ: 肋骨は左右とも13本で外腹斜筋(OX)は4肋骨から最上位筋腹で胸腰(背)筋膜からも起こる。外側皮枝前枝から分岐する支配神経は左右共Th4からL2で、筋内分布を見るとTh4,5,6,7の支配神経はそれぞれ同じ4肋骨から7肋骨に起始する筋腹に分布するが、Th8,9の2分節の神経は8肋骨に起始する筋腹にのみに分布する。そしてTh10からTh13は1分節高い肋骨起始筋腹に分布し、更にTh13は13肋骨と胸腰筋膜から起る筋腹にもひろく分布する。2) ブラウンキツネザル: 左右とも肋骨は12本で、OXは4から12肋骨と胸腰筋膜から起り腹直筋鞘前葉に停止する。支配神経はTh4からL3で、筋内分布の解析では各分節毎に、およそ3種類の枝に分けられた。1)筋束の方向に対して斜に走行しながら筋のほぼ中央で細かく枝分れする枝。2)筋束方向に沿ってあまり枝を出さずに停止腱膜又はその近くまで達する枝。3)起始部方向へ反回する枝である。3) エリマキキツネザル: 肋骨は左右とも12本で、OXは5肋骨以下の肋骨と腰腰筋膜から起こる。筋の支配神経はTh5からL3で、筋内分布はブラウン同様3本の主枝が認められ、筋束の起始分節と神経分節との関係は右では5・6肋骨起始筋束には同じ分節の神経が分布するが、7肋骨起始筋束ではTh7だけではなく下半分にはTh8も分布する。以下L1まで筋束と神経分節との間には半分節のずれが起る。これはこの種の特徴で1分節の筋枝だけが半分節の筋腹に圧縮される。4) スローロリス: 肋骨は左右とも16本と他の原猿に比べて多いが、OXの起始は8肋骨からと低いので、肋骨起始筋腹の数は9で他種とほぼ同じである。下位は16肋骨までと胸腰筋膜からも起る。支配神経は左右ともTh8からL3で、筋束の肋骨起始分節と支配神経分節は、右側ではTh16とL1の間で1分節のずれが、左側ではTh11とTh12の間が圧縮されTh13以下では1分節のずれが見られる。筋内分布は筋束を斜に横断しながら筋枝を出す枝と筋束方向とほぼ同じに走行する枝が確認された。

資料19

霊長類の肝臓の比較解剖学的研究

— 新しい鋳型標本作製法とそれに基づくニホンザルの肝臓 —

中久喜正一(東京農工大)・江原昭善(日本福祉大・相山女学園大)

ニホンザルの肝臓に関する形態学的研究はすでに報告されているが、今回はその再確認の他に、とくに新たに考案した鋳型標本作製法を試用した。使用した資料は京都大学霊長類研究所所蔵の野生ニホンザル2例の未固定肝臓である。あらかじめ外観をよく観察・記載した後、新考案のエポキシ樹脂注入法(中久喜・江原)により鋳型標本作製した。この方法は比較的簡便であり、また完成した標本はある程度の弾力性が保持されているため、複雑な部位の観察に適している。これらの標本を用いて、すでに同定済みの23種類の霊長類の肝臓の葉区分・門脈・肝静脈および胆管系の分布状態と比較した。

ニホンザルの肝臓も、臍静脈の侵入部の左側から門脈分布を受ける領域を内側左葉、同じく右側から門脈分布を受ける領域を方形葉と定義して葉区分を行なうと、他の霊長類の肝臓と同じく外側左葉、内側左葉、方形葉、内側右葉、外側右葉、尾状葉および乳頭葉の7葉に区別できる。外部観察と対比すると、内側右葉と方形葉は癒合して一葉になっており、その境に胆嚢が位置することがわかる。他の肝葉はそれぞれ分かれているが、乳頭葉と尾状葉は発達が悪い。